

しんぱん
新版

しどうようもんしゅう
指導要文集

だいさんしゅう
だいさんしゅう

第三章

しゆくめいてんかん
しゆくめいてんかん

宿命転換

びょうき
びょうき

病氣

てんだい

いま

わ

しつく

みなかこ

よ

こんじょう

しゅふく

天台云わく

「今の我が疾苦は皆過去に由る。

今生の修福

ほう

しょうらい

あ

とううんぬん

は報、将来に在り」等云々。

かいもくしょう

(005 開目抄

びょうき

病氣

112

ページー13行)

はち まき い

きょうてん

じゅじ

もの み

八の巻に云わく「もしまたこの經典を受持せん者を見

かあく い

じつ

ふじつ

て、その過惡を出ださば、もしは実にもあれ、もしは不実

ひと

げんぜ

びやくらい

やまい

え

にもあれ、この人は現世に白癩の病を得ん。もしこれを

きょうしよう

まさ

せぜ

げしそけつ

しゅじゅん

輕笑することあらば、当に世々に牙齒疎欠、醜唇・

びようび

しゅきやくりようらい

げんもくかくらい

しんたいししゅえ

平鼻、手脚繚戻し、眼目角睐に、身体臭穢にして、

あくそう

のうけつ

すいふく

たんけ

もろもろ

あくじゅうびよう

もん

惡瘡・膿血、水腹・短氣、諸の惡重病あるべし」文。

(026 十法界明因果抄

びようき

病氣 466 ページ 7 行)

り。
妙みようとは蘇そせい生の義ぎなり。蘇そせい生もうと申もうすは、よみ蘇がえる義ぎな

（033 法華經題目抄（妙みようの三義さんぎの事こと）

病氣びようき541ページー5行

妙みようとは蘇そせい生いみという意味そせいです。蘇よみがえ生えとは蘇そせいるえということえです。

ひゆほん

しんじようしゆしよ

くえふじよう

み

つね

しゆしよ

譬喩品に「身常臭処

垢穢不浄

（身は常に臭処にして、

くえふじよう

い

いま

にちれんとう

たぐ

垢穢不浄なり」と云えり。

今、日蓮等の類い、

なんみようほうれんげきよう

とな

たてまつ

もの

しきしんとも

しようじよう

南無妙法蓮華経と唱え奉る者は、色心共に清浄なり。

おんぎくでん

（095 御義口伝

びようき

病氣

1065

ページー17行

のうせつ

やく

とき

しやか

能説に約する時は釈迦なり。

しゅじょう

じゅうびょう

しょうじょ

かた

衆生の重病を消除する方

やくおう

やくしによらい

は、薬王・薬師如来なり。

おんぎくでん

(095 御義口伝

びょうき

病氣

1116

ペー

ジー

4

行)

やまい お 病の起こりを知らざる人の病を治せば、いよいよ病は
ばいぞう 倍增すべし。

（しゅじゅおんふるまいごしよ
107種々御振舞御書

びょうき 病氣
1241ページー4行

びょうき お 病氣の起こる原因を知らない人が病氣を治療すれば病氣はます
ばいぞう ます倍增するでしょう。

やまい 習

病のならいは、いずれの病も、重くなりぬれば「これに

過 やまい

すぎたる病なし」とおもうがごとし。

こうにちぼうごしよ

(108 光日房御書

びょうき

病氣

1252

ページー10行)

にちれん

はは

そうら

げんしん

やまい

されば、日蓮、悲母をいのりて候いしかば、現身に病を

癒

しかねん

じゅみよう

延

いま

によにん

いやすのみならず、四箇年の寿命をのべたり。今、女人

おんみ

やまい

み

たも

こころ

ほけきよう

の御身として病を身にうけさせ給う。心みに法華經の

しんじん

た

ご

覧

信心を立てて御らんあるべし。

かえんじようごうしよ

(130 可延定業書

びようき

病氣 1308 ページ 6 行)

にちれん

せんねん

ひぼ

じゅうびよう

ごほんぞん

いの

さて日蓮は先年、悲母が重病のとき御本尊に祈ったところ、

げん

びようき

なお

よねんかん

じゅみよう

現にその病気を治すことができただけでなく、四年間の寿命をの

じよせい

み

びようき

ばすことができたのです。いま、あなたは女性の身として病気になる

ほけきよう

ごほんぞん

しんじん

お

りました。こころみに法華經（御本尊）への信心を起こしてごらん

さい。

さんねん

かまえて、さもと三年、はじめのごとくにきゆうじせさせ

灸 治

たま やまい ひと むじよう 免

給え。病なき人も無常まぬかれがたし。ただし、としの

果 ほけきよう ぎようじや

ひごう し

はてにはあらず、法華經の行者なり。非業の死にはある

ごうびよう

そうら

ごうびよう

べからず。よも業病にては候わじ。たとい業病なりと

ほけきよう おんちから 頼

も、法華經の御力たのもし。

134 富木尼御前御返事

ときあまごぜんごへんじ

びようき

病氣 1316 ページ 14 行

あじやせおう ほけきよう たも しじゅうねん いのち 延 ちんしん

阿闍世王は法華經を持つて四十年の命をのべ、陳鍼は

じゅうごねん いのち あま 御 前 ほけきよう ぎょうじや

十五年の命をのべたり。尼ごぜん、また、法華經の行者

ごしんじん つき 勝 潮 満

なり。御信心、月のまさるがごとく、しおのみつがごと

やまい う いのち 延 ごうじよう 思

し。いかでか病も失せ寿もののびざるべきと強盛におぼ

み じ こころ もの 歎

しめし、身を持し心に物をなげかざれ。

（134 富木尼御前御返事

ときあまごぜんごへんじ

びようき
病氣
1316 ページ 16 行

そ ひと ふた やまい いち み やまい ち

夫れ、人に二つの病あり。一には身の病。いわゆる、地

だいひやくいち すいだいひやくいち かだいひやくいち ふうだいひやくいち いじようしひやく

大百一、水大百一、火大百一、風大百一、已上四百

しびよう やまい ほとけ じ

四病なり。この病は、たとい仏にあらざれどもこれを治

じすい るすい ぎば へんじやくとう ほうやく

す。いわゆる治水・流水・耆婆・扁鵲等が方薬、これを

じ 癒 い に ころ やまい

治するにいゆて愈えずということなし。二には心の病。

さんどくないしはちまんしせん やまい やまい にてん

いわゆる三毒乃至八万四千の病なり。この病は二天

さんせん ろくしとう じ がた しんのう こうていとう

三仙・六師等も治し難し。いかにいわんや、神農・黄帝等

ほうやくおよ

の方薬及ぶべしや。

ころ やまい じゆうじゆう せんじん しょうれつわ

また心の病、重々に浅深・勝劣分かれたり。

（139 治病大小権実違目

びようき 病氣 1329 ページ 9 行）

およそ人間の病氣は大きく分けて二種類あります。一つは身体

の病氣です。人間の身体は地水火風の四大より成り立っており、

病氣も地水火風にそれぞれ百一ずつ合計四百四病あります。

これらの病氣は仏でなくても治すことができます。たとえば経文

に説かれる持水・流水の親子や釈尊在世の耆婆や中国の扁鵲

などの名医が処方して治せないという病氣はありませんでした。

第二の病氣は心の病です。これは貪・瞋・癡の三毒をはじめと

はちまんよんせん

むすう

ぼんのう

やまい

びょうき

きょう

する八万四千の無数の煩惱の病です。この病気はバラモン教の

かみ

にてん

まけいしゆらてん

びちゆうてん

かいそ

さんせん

かびら

神である二天（摩醯首羅天と毘紐天）、開祖である三仙（迦毘羅・

うるそうぎや

ろくしやば

ろくしげどう

ふらんなかしよう

まかりくしやりし

漚樓僧佉・勒沙婆）や六師外道（富蘭那迦葉・末伽梨拘舍梨子・

さんじややびらていし

あぎたししやきんばら

からくだかせんねん

刪闍那毘羅胝子・阿耆多翅舍欽婆羅・迦羅鳩駄迦梅延・

にけんだにやくだいし

なお

ちゅうごくこだい

めいおう

尼乾陀若堤子）なども治しにくいもので、ましてや中国古代の名王

しんのう

こうてい

くすり

およ

である神農や黄帝などの薬の及ぶところではないでしょう。また

こころ

やまい

あさ

ふか

おも

かる

心の病は浅いものと深いもの、重いものと軽いものといったよう

かずおお

わ

に数多くに分かれています。

「病やまいの起おこる因縁いんねんを明あかすに、六むつつ有あり。一いちには四大しだいの
順じゆんならざるが故ゆえに病やむ。二にには飲食おんじきの節せつならざるが故ゆえに
病やむ。三さんには坐禅ざぜんの調ととのわざるが故ゆえに病やむ。四しには鬼便きたより
を得う。五ごには魔まの所しよ為いなり。六ろくには業ごうの起おこるが故ゆえに病
む」

（151 太田入道殿御返事

おおたにゆうどうどのこへんじ

病氣びようき
1359 ページ 3 行

（摩訶止觀に）「病氣びようきの起おこる原因げんいんを明あかすと、六むつつある。一ひとつ
は地ち、水すい、火か、風ふうの四大しだい（身体しんたいを構成こうせいする基本要素きほんようそ）が順調じゆんちようで

びょうき

ふた

ぼういんぼうしよく

びょうき

みつ

ないため病気になる。二つは暴飲暴食によつて病気になる。三つ

ざぜん

びょうき

よつ

あつき

すき

は座禅がととのわないために病気になる。四つは悪鬼が隙をねらつ

たく

いつ

ま

むつ

しゅくごう

て巧みにつけこむ。五つは魔のしわざにより。六つは宿業にために

びょうき

病気になる」とあります。

こんぜ あくごうじようじゆ ないしかなら まさ じごく ないしさんぽう

「今世に悪業成就し乃至必ず応に地獄なるべし乃至三宝

くよう ゆえ じごく お げんぜ むく う

を供養するが故に、地獄に堕ちずして現世に報いを受く。

こうへ め せ いた

いわゆる頭と目と背との痛みなり」

おおたにゆうどうどのごへんじ

(151 太田入道殿御返事

びようき

病氣 1359 ページ 7 行

とき

おうしゃだいじよう

あじやせおう

しょうへいあく

ないしちち

「その時、王舎大城の阿闍世王その性弊悪にして乃至父

がい

お

こころ

けねつ

しょう

ないしこころ けねつ

ゆえ

を害し已わって、心に悔熱を生ず乃至心悔熱するが故

へんたい

かき

しょう

かき

しゆえ

ふごん

に、遍体に瘡を生ず。その瘡、臭穢にして附近すべから

とき

はは

いだいけ

な

しゆじゆ

ず。その時、その母にして韋提希と字づくるものは、種々

くすり

つ

かき

ま

の薬をもつてためにこれを傳く。その瘡、ついに増して

ごうそんあ

おうすなわ

はは

もう

かき

降損有ることなし。王即ち母に白す。『かくのごとき瘡は

こころ

したが

しょう

しだい

お

心に従って生ず。四大より起こるにはあらず。もし

しゆじよう

よ

じ

ものあ

い

ことわりあ

衆生に能く治する者有りと言わば、この処有ることな

うんぬん

とき

せそん

だいひどうし

あじやせおう

けん』と」云々。「その時、世尊・大悲導師、阿闍世王の

がつあいざんまい い さんまい い お だいこうみよう
ために月愛三昧に入り、三昧に入り已わつて、大光明を
はな 放ちたもう。その光、清涼にして、往つて王の身を照
み かさすなわ い
らすに、身の瘡即ち愈えぬ」

（151 太田入道殿御返事

おおたにゆうどうどのごへんじ

びょうき
1359 ページ 16 行

きよう

すなわ

えんぶだい

ひと

やまい

ろうやく

「この経は則ちこれ閻浮提の人の病の良薬なり。もし

ひとやまいあ

きよう

き

え

やまい

すなわ

人病有らん、この経を聞くことを得ば、病は即ち

しょうめつ

ふろうふし

消滅して、不老不死ならん」

おおたにゆうどうどのごへんじ

（151 太田入道殿御返事

びようき

病氣 1360 ページ 6 行

ほけきようやくおうぼさつほんじほん

ほけきよう

ぜんせかい

いっさいしゆじよう

（法華経薬王菩薩本事品に）「この法華経は、全世界の一切衆生

びようき りようやく

びようき

ひと

きよう

き

の病氣の良薬である。もし、病氣の人がこの経を聞くことがで

びようき なお

つね わかわか

せいめい

たも

きれば、病氣は治ってしまい、常に若々しい生命を保つことがで

きるのであろう」とあります。

おんやまい かんが

ろくびよう い

なか ごびよう

御病を勘うるに、六病を出でず。その中の五病はしば

お だいろく ごうびよう もつと じ がた

らくこれを置く。第六の業病、最も治し難し。はたま

ごうびよう かる あ おも あ たしやうさだ

た、業病に軽き有り重き有って、多少定まらず。なかん

ほつけひぼう ごうびよう さいだいいち

ずく、法華誹謗の業病、最第一なり。

おおたにゆうどうどのごへんじ

(151 太田入道殿御返事

びやうき

病氣 1360 ページ 8 行)

しよじ みようほう がつあい ちようか
所持の妙法は月愛に超過す。 あに輕瘡を愈やして長寿を
まね
招かざらんや。

(
151 太田入道殿御返事

おおたにゆうどうどのごへんじ

びようき
1362 病氣
ページー15行)

ほけきよう　もう　おんきよう　しんしん　しよびよう　ろうやく
法華經と申す御經は、身心の諸病の良薬なり。

（155 太田左衛門尉御返事
おおたさえもんのじようごへんじ

びようき
病氣 1372 ページ 12 行

そ おも

じゅうびよう りようじ

ろうやく こうさく

夫れ以んみれば、重病を療治するには良薬を構索し、

ぎやくぼう くじよ

ようほう

逆謗を救助するには要法にはしかず。

そやにゆうどうどのもとごしよ

（162 曾谷入道殿許御書

びようき

病氣

1390

ページー3行

これひとえに、じょうやく上薬たもを持ち用いて衆生しゅじょうの重病じゅうびょうを治せん
とせる、これなり。じ

162 そやにゆうどうどのもとごしよ曾谷入道許御書

びょうき病氣
1396 ページ 13 行

そ ひと にびよう いち み やまい じだい

夫れ、人に二病あり。一には身の病。いわゆる、地大

ひやくいち すいだいひやくいち かだいひやくいち ふうだいひやくいち いじようしひやく

百一・水大百一・火大百一・風大百一、已上四百

しびよう やまい ちすい るすい ぎば へんじやくとう ほうやく

四病。この病は治水・流水・耆婆・扁鵲等の方薬をもつ

じ に こころ やまい さんどくないし

てこれを治す。二には心の病。いわゆる三毒乃至

はちまんしせん やまい ほとけ にてんさんせん じ

八万四千の病なり。仏にあらざれば二天三仙も治しがた

しんのう こうてい ちからおよ

し。いかにいわんや、神農・黄帝の力及ぶべしや。

なかつかさのさえものじようどのごへんじ

(213 中務左衛門尉殿御返事

びようき

病気 1602 ページー6 行)

ほけきよう

い

法華經に云わく「もし医道を修して、方に順じて病を治

しゆ

ほう

じゆん

やまい

じ

ほか やまい ま

せば、さらに他の疾を増し、あるいはまた死を致さん。

ぞうぎやく

しかもまた増劇せん」。

(213 中務左衛門尉殿御返事

なかつかさのさえものじようどのごへんじ

びようき

病氣 1603 ページ 3 行

ほけきようひゆほんだいさん

も

いどう

いがく

まな

ほうほう

法華經譬喩品第三に「若し、医道（医学）を学んで、その方法に

びようき

ほか

びようき

へいはつ

したがって病気をなおそうとすれば、さらに他の病気を併発した

し いた

びようぜい

ま

り、あるいは死に至ることもある。しかも、また病勢を増すであろ

う」とあります。

えきびよう あじやせおう かさ
この疫病は阿闍世王の瘡のごとし。 彼は仏にあらずんば
じ がた こ ほっけ のぞ がた
治し難し、 此は法華にあらずんば除き難し。

213 中務左衛門尉殿御返事

なかつかさのさえものじょうどのごへんじ

びようき
1603 ページ 7 行

やまい にく

お

じ

ふし

お

じ

病は肉より起これば治しやすし、節より起これば治しが

いえ

垣

ぬすびと

ひと

科

たし。家にはかきなければ盗人いる。人にはとががあれば

かたきたよ

受

厄

もう

節

々

いえ

敵便りをうく。やくと申すはふしぶしのごとし。家に

垣

ひと

とが

兵

士

かきなく、人に科あるがごとし。よきひようじをもつて

守

ぬすびと

擲

取

節

やまい

予

じ

まぼらすれば、盗人をからめとる。ふしの病をかねて治

いのち

すれば命ながし。

(216 日眼女造立釈迦仏供養事

にちげんによぞうりゆうしやかぶつくようじ

びようき

病気 1610 ページ 7 行

まんだらよ

よ

しん

たも

なんみようほうれんげきよう

この曼荼羅能く能く信ぜさせ給うべし。

南無妙法蓮華経は

ししく

やまい 障

師子吼のごとし、いかなる病さわりをなすべきや。

きようおうどのごへんじ

(225 経王殿御返事

びようき

病気 1633 ページ 1 行

まんだら

ごほんぞん

しん

この曼荼羅（御本尊）をよくよく信じていきなさい。

なんみようほうれんげきよう

しし

さけ

びようき

南無妙法蓮華経は師子の叫びのようなものです。どのような病気

だいもく

とな

ひと

しあわ

も、（題目と唱える人の幸せを）さまたげることとはできません。

びようになん くすり

与

病人に薬をあたうるには、さきに服したる薬の様を知

くすり

くすり

行

あ

争

ひと

るべし。薬と薬とがゆき合つてあらそいをなし、人を

損

そんずることあり。

なんじようひようえしちろうどのごしよ

(296 南条兵衛七郎殿御書

びようき

病氣

1829

ページー6行)

ほとけ 成

み そうら

てんま

げどう

やまい

すでに仏になるべしと見え候えば、天魔・外道が病を

付

脅

こころ

そうろう

いのち

限

つけておどさんと心み候か。命はかぎりあることな

驚

り。すこしもおどろくことなかれ。

きじん 奴

ひと

悩

つるぎ

逆

また鬼神めらめ、この人をなやますは、剣をさかさま

呑

たいか

抱

さんぜじつぼう

ほとけ

だいおんてき

にのむか、また大火をいだくか、三世十方の仏の大怨敵

ひと

病

となるか。あなかしこ、あなかしこ。この人のやまいをた

治

守

ちまちになおして、かえりてまぼりとなりて、鬼道の大苦

抜

をぬくべきか。

ほつけしょうみょうしょう

びようき
病氣 1931 ページ 9 行

ほとけ

おも

てんま

げどう

びようき

かならず 仏 になるだろうと思えたので、天魔・外道が病氣にさせ

いのち かぎ

ておどそうとためしているのでしょうか。命は限りあるものですか

びようき

すこ

おどろ

きじん

ら、病氣になっても少しも驚いてはなりません。また、鬼神ども

ひと ときみつ

なや

つるぎ

よ、この人（時光）を悩ますことは、剣をさかさまにのむか、また

たいか

さんぜじつぼう

ほとけ

たいてき

大火をいだくか、三世十方のあらゆる 仏 の大敵となるのか。おそれ

ひと びようき

なお

ぎやく

おおく、つつしむべきことです。この人の病氣をすぐに治して、逆

ひと しゅゐ

がきどう

くる

に、この人を守護して、餓鬼道の苦しみをいやすべきです。

ほとけ もう ひと

仏と申せし人は、これにはにるべくもなきいみじき

医

ほとけ ふし くすり 説 たま いま

くすしなり。この仏、不死の薬をとかせ給えり。今の

みようほうれんげきよう ごじ

妙法蓮華經の五字これなり。しかも、この五字をば

えんぶだい ひと やまい ろうやく

説 そうら

「閻浮提の人の病の良薬なり」とこそとかれて候え。

みようしんあまごぜんごへんじ びようしりようやく こと

361 妙心尼御前御返事（病之良薬の事）

びようき

病氣 1962 ページ 14 行

ひとし

病

とうじ

壱岐

対馬

人の死ぬることはやまいにはよらず。当時のゆき・つしま

者

やまい

皆

蒙古びと

いちじ

ものども、病なけれども、みなながらむこ人に一時に

打殺

やまい

し

ふじよう

うちころされぬ。病あれば死ぬべしということ不定な

り。

病

ほとけ

おん

計

また、このやまいは仏の御はからいか。そのゆえは、

じようみようきよう

ねはんぎよう

やまい

ひとほとけ

成

由説

浄名経・涅槃経には、病ある人仏になるべきよしと

そうろう

やまい

どうしん

発

そうろう

かれて候。病によりて道心はおこり候なり。

みようしんあまごぜんごへんじ

びようしりようやく

こと

361 妙心尼御前御返事 (病之良薬の事)

びようき

病気 1963 ページ 5 行

ひと し

びようき

げんいん

人が死ぬということは、病気だけがその原因ではありません。い

いき つしま ひと

びようき

みな もうこぐん

まの壱岐・対馬の人たちは、病気ではなかったのに、皆、蒙古軍に

せ いちじ ころ

びようき

攻められて、一時に殺されてしまいました。病気だからかならずしも

し き

にゆうどうどの

びようき

ほとけ

死ぬとは決まっていらないのです。また、入道殿のこの病気は、仏

はいりよ

りゆう

じようみようきよう

のご配慮によるものではないでしょうか。その理由は、浄明経

ゆいまきよう

ねはんぎよう

やまい

ひと じようぶつ

と

（維摩経）や涅槃経には、病のある人は成佛できると説かれて

びようき

ぶつどう

もと

ふころ

お

いるからです。病気によって仏道を求める心が起こるのです。

ぶつぽう

しん

こんどしようじ

離

ひと

こころ

緩

仏法を信じて今度生死をはなるる人の、すこし心のゆる

勧

えきびよう

ほとけ

与

たも

励

なるをすすめんがために、疫病を仏のあたえ給う。はげ

こころ

勧

こころ

ます心なり、すすむる心なり。

えんぶだいちゆうごしよ

(394 閻浮提中御書

びようき

病氣

2048

ページー17行)

その上、日蓮の身ならびに弟子等、過去の謗法の重罪い
まだ尽きざるの上、現在は多年の間謗法の者となり、ま
た謗法の国に生まる。当時、信心深からざらんか、あにこ
れを脱れんや。ただし、貴辺この病を受くるの理、ある
人これを告ぐ。予、日夜朝暮に法華經に申し上げ、朝暮に
青天に訴う。除病の由、今日これを聞く。喜悦何事かこ
れに過ぎん。

(450 除病御書